

平成 22 年 6 月 26 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520364

研究課題名（和文） アジア諸言語における喉頭特徴の相関

研究課題名（英文） Interaction between laryngeal features in Asian languages

研究代表者

遠藤 光暁（ENDO MITSUAKI）

青山学院大学・経済学部・教授

研究者番号：30176804

研究成果の概要（和文）：

台湾南島語，ベトナム語諸方言，チャム語系諸言語，ミャオ語，ツングース系言語，チュルク系諸言語，漢語ドンガン語，延辺朝鮮語，モンゴル語などにみられる喉頭特徴を現地調査により記述を行った。一方，こうした諸言語の古文獻に対する原本調査・研究も行い，東アジアの広範な言語に基づいて喉頭が制御している音調・phonation type・長さなどの特徴の相互関係が実に多種多様であることが観察され，また文献によっても跡づけられた。

研究成果の概要（英文）：

Glottal features were described by the field investigations to Taiwan Austronesian languages, Vietnamese dialects, Chamic languages, Miao language, Tungusic languages, Turkic languages, Dunganese, Yanbian Korean and Mongolian, etc. In the meantime, investigations and researches of old documents of these languages were carried out. As a result, various relationships of interaction among phonetic features such as tone, phonation types and longitude etc. were observed and traced by philological documents as well.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学(3001)

キーワード：音声学、言語史、声調、voice quality、子音

## 1. 研究開始当初の背景

東アジア・東南アジアの中央部に位置する諸言語，即ち漢諸語(Sinitic Languages，いわゆる中国語の諸方言)・チベットビルマ語・

タイ諸語・ミャオヤオ語は概して声調を持った単音節語的な特徴を共通にしており，その周囲のアジアの諸言語の中にあつて際立っている。

ところで、これらの諸言語において、声調は歴史的に遡ると音節頭子音や音節末子音の類別を条件として分裂した出来たことを跡付けることができる。その場合、音節頭子音の特徴としては大半が有声性、時には有気性が条件となっており、音節末子音の特徴としてはグロッタルストップで終わるかhで終わるか(-s>-hなどの変化を経て、より古い時代には-sなどの子音であったことが分かる場合もある)、といった点に絞られ、これらを一言で概括するならば喉頭によって制御されている特徴である。

そして、声調のピッチパターンというものももちろん喉頭によって一義的にコントロールされているものであり、通例では別個のものとして扱われている子音の調音方法と声調は、実際には全く同一の調音器官 喉頭によって制御されているのである。そこで、歴史的に見て、両者が緊密な関係にあるのも当然のことである。

一方、モンクメール諸語の多くの言語においては有声子音の消失に伴ってレジスターの違いというものが生じたが、これは主として母音のphonation typeの違い、すなわちbreathy voice, creaky voice, normal voiceなどの違いであり、現代クメール語などでは更に進んで母音のphonation typeの違いは失ったが母音の調音点の系統的な大幅な違いをもたらしている。phonation typeというのも実に喉頭によって制御されている音声特徴である。

このように喉頭特徴というのは子音・母音および声調などの超分節音的特徴のすべてにまたがる特徴であり、共時的にそれらの相関関係が実際に観察される言語もあれば、通時的にかつて生じた音韻変化において喉頭特徴が重要な役割を演じていたと考えられる言語もある。

さて、東アジア・東南アジアの単音節声調言語のSprachbundを円環状にとりまく諸言語、即ち日本語・アイヌ語・朝鮮語・アルタイ諸語・インドやイランなどのアジア側の印欧諸語・ドラビダ語・オーストロネシア語などでは音節声調は通例見られず、高さアクセントの対立が存在するかかつて存在していた日本語や朝鮮語を除くと、suprasegmentalな特徴というのはイントネーション以外には音韻対立として利用されていない。しかしながら、こうした言語において、子音の有声性や有気性といった特徴はずいぶん様々な様相を共時的・通時的に呈している。

そこで本研究は、東アジア・東南アジアの声調言語ないしレジスター言語を中心としつつ、その周辺言語も視野に入れてアジア全域

における子音・母音・超分節音の喉頭特徴の相関を共時的・通時的・類型論的に跡付けることを目指す。

もちろん、例えば一口で子音の喉頭特徴といっても、有気音だけをとっても中国語北京方言、朝鮮語ソウル方言、タイ語バンコク方言など私が直接耳にする機会の多い言語でもそのあり方は随分異なっており、更に通例有気音の音韻対立がないとされるモンゴル語ウランバートル方言でも少なくとも母音レベルでは明瞭に有気音が存在しており、おそらく音韻論的にも有気性を弁別特徴と認めたほうがよいと思われる言語や日本語のように語頭の無声子音は軽い有気性を帯びるといった言語もあり、子音なら子音・母音なら母音・超分節音ならば超分節音のそれぞれについての音声的特質を把握することも必要である。

こうした着想を得るに至った経緯は、ここ3-4年来中国領内の漢語方言およびスイ語・カム語・ダイ語・アムドチベット語・台湾南島語の一つブユマ語の世代差に反映された音韻変化を現地調査によって跡付けたり、その周辺地域に直接赴いてタイ語・クメール語・ビルマ語・ザイワ語・モンゴル語などに直接接しているうちに、その多様性の豊穡さに驚くと同時に、その多岐にわたる音韻現象も「喉頭特徴」というキーコンセプトによって統一的な理解を与えることができるように感じてきた。

それに先立ち、院生時代に通っていた東京大学医学部音声言語研究施設の重要な研究課題の一つが筋電図による喉頭の制御プロセスであり、実験音声学的なアプローチからも喉頭特徴に興味を抱いており、フィールド言語学・文献による言語史・実験音声学といった側面からの総合的解明を目指す。

## 2. 研究の目的

音声・音韻研究においては、直接その言語の話者の発音に接し、調査者自らが模倣して話者の認可を得られるまでの精度を得ることが基本である。本研究にあっても現地調査を主として行い、アジア諸言語における子音・母音・超分節音的特徴にわたる喉頭特徴の観察・記述を可能な限り広範囲な言語について行う。これまで中国領内および東南アジアを中心としてさまざまな言語の記述を行ってきたが、本研究においてもこれまでの蓄積に基づき更に厚みを加え、更にこれまで調査したことのない地域にも直接赴き、一次資料を得る。また、録音資料が得られる言語・方言については、単なる文字だけの記述よりも遙かに価値が高いので、それについても観察を行う。それと同時に、音声資料に対して音響分析を行い、諸喉頭特徴に対するより深い理解

を目指す。

以上のような直接的な記述は一人で行う限り数十地点程度にとどまらざるを得ないが、アジア地域における諸喉頭特徴に関するより全面的な認識を得るために、これまでに出版された諸言語・諸方言に関する調査報告にもとづき「アジア言語地図」ないし「東ユーラシア言語地図」を作成する。

一方、以上のような共時的な研究と並行して、アジア諸言語における言語史資料に基づき、通時的にどのような変化過程を経てきたのかも跡付ける。これによって子音・母音・超分節特徴がそれぞれどのような相互関係をもっているかについて具体例を以って示すことが可能になる。

以上のような研究を総合して、これまで個別言語について研究されてきた喉頭特徴に関して、アジアの諸言語という広い視野から豊富な具体例に基づき、実際に認められる共時的・通時的な相関関係を帰納し、普遍的に成立する音韻規則を与えるのが本研究の目的である。

より具体的には私がこれまで手がけてきた中国語諸方言およびタイ系諸語を中心とし、それとともにその周辺のチベット・ビルマ諸語、オーストロアジア諸語、オーストロネシア諸語等にも目配りをし、更にその周辺の言語をも極力視野に入れつつ、精度が高く、地点密度の高い全面的な理解に到達したいと希望している。

### 3. 研究の方法

平成19年度

まず、現地調査をアジア地域の適当なところを選定して行う。これは休暇中を利用するため、8月-9月ないし12月-1月になる可能性が高いが、中国領内の少数民族語(チベット・ビルマ系の言語ないし海南島のタイ系言語・リー語を現在有力候補と考えている)およびその他の国の言語調査(ロシアシベリア地域ないし中央アジア諸国のツングース系ないしチュルク系の言語を有力候補として考えている)を2回以上に分けて行うかあるいは1回で移動しつつ行う。一方、国内でも話者が見つかる場合には、国内でも調査を行う。

一方、以下の具体的な課題について研究を着手する:

#### 1) 声調調値の変化の方向性

声調は声のピッチの高低のパターンを不可欠な特徴とし、そのほかの喉頭特徴を付随特徴としてもつ場合もあるが、これまで自ら調査することによって直接得た中国語

およびタイ系言語の世代差に反映した声調調値の通時的変化の方向性を帰納的に研究する。また、他の研究者もアジア諸語について音韻の世代差に関して報告を出しており、そうした記述を集成して、より広範な資料に依拠しつつ、実際に生じた音韻変化から、その通時的な方向性を帰納する。

#### 2) 音節頭子音のピッチへの影響

通常、有声頭子音を有していた声調は無声頭子音よりも開始部が低いことが多いのが多くの言語・方言において認められるが、そうでない言語・方言もある。また有気音も声調を低くする作用があると思われるが、そうでない言語・方言もある。この点について、中国語諸方言では全国にほぼまんべんなく分布する1000-3000地点程度のサンプルを集めることが可能であり、タイ系言語でも今日では数百地点のサンプルを集めることが可能になっている。中国領内の調査報告についてはこれまですでにほぼ完璧に収集済みであったが、私が2006年9月より2007年3月まで青山学院大学在外研究員としてタイ・チュラロンコン大学に滞在中であり、チュラロンコン大学・マヒドン大学などの未公刊の博士論文・修士論文として出された東南アジアの諸言語の調査報告200点ほどを現在鋭意収集中であり、これにより、漢語・タイ系言語の声調調値のかなり密度の高い分布地図を描くことが潜在的には可能になりつつあり、科研費が得られたならばGISなどの汎用性の高い描図方法により東アジア・東南アジア地域の言語地図の作成に着手する。

#### 3) 音節末子音のピッチへの影響

これについてはチベット・ビルマ語が特に豊富な実例を現在でも示しているのだから、個別方言における諸類型を考察するとともに、やはり上の項目と同様にして言語地図の形にして、より全面的な認識を得たい。

#### 4) ピッチとphonation typeとの関係

低い音調はbreathy voiceで、高い音調はcreaky voiceで発音されるという傾向があるが、例えば現代北京語の3声のように音節が全体としてbreathyで発音され、音節中央の最低の高さのところではcreaky voiceも伴い、ときにはglottal stopにもなる、といった言語や方言も見られる。これはチベット・ビルマ系言語の母音の緊張度の対立がある言語では顕著に見られ、ほかベトナム語やタイ系言語でも実例があり、こうした実例を語族の違いを超えて広く収集して、一般的な法則性を導く。

#### 5) 有声性と有気性の対立の有無と声調の有

無との関係

漢語・タイ系言語・ベトナム語・チベットビルマ語など現在声調をもつ諸言語群ではいずれも過去に存在した有声頭子音が消失してその代償として声調の分岐が生じている。声調の存在と有声子音の存在は相容れない関係にあるように思われ、それがあらぬかこれらのアジアの声調言語を囲む諸言語では有声子音が存在することが多い。この点について、アジアの広域的言語地図を作成して声調と有声子音の共起関係について探る。また、これらの言語群の言語史も参照して、通時的にどのような変化過程を経てきたのかも考慮に入れる。

6) 有気音の音声実態のより精密な把握とその通時的生成過程

有気音は声調言語にあっては多く見られる子音であるが、非声調言語ではあまり多くないかの如き印象もある。しかし、朝鮮語やインド諸語のように有気音が非声調言語であっても有気音の存在する言語も存在する。そこで、やはりアジアの広域的言語地図を作成して、その相関関係を明らかにする。また一口で有気音といってもその音声実態は諸言語においてかなり異なっており、音声実験などの手法も取り入れてその一層精密な把握を行う。一方朝鮮語では有気音は後世になって生じたとされ、またチベット・ビルマ語でもそうであり、タイ系言語についてもオードリクールのよう有気音が後から生じたとする人もいる。オーストロアジア言語でも有気音は後で生じたとされ、またクメール語のように子音連続の第一要素である閉鎖音は現在有気音であるが、アンコール期以前の碑文ではそれが無気音であったことが証せられる言語もあり、こうした有気性に関する変化のメカニズムをアジア諸言語について跡付ける。

7) 有気音の無声化に際して無気音となるか有気音になるかの条件づけ

有気音が無声化する場合、一律無気音となる言語、一律有気音となる言語、声調の類別などに応じて両者に分岐する言語などいろいろなタイプが認められるが、それをアジア諸言語について鳥瞰する言語地図を作成する。

8) 前喉頭化有気音ないし implosive の地理分布とその形成過程

東南アジア地域では前喉頭化有気音ないし implosive をもつ言語が語族の違いを超えてかなり分布する。ところが、言語史的にはタイ語でもモンクメール語でもそれらは後で形成されたと思われる節がある。しかし、細部には詰めなければならない問題が山積しており、この問題についてより広い視野から、しかし個別言語の細部をゆるがせにせず

に言語地理的・通時的考察を行う。

9) 鼻音・流音の有声・無声の対立

東南アジア諸語では鼻音・流音などで有声・無声の対立を持つ言語が多く、その音声的実態・通時的変遷について考察を行う。またモンゴル語のように流音が現在一律無声側面摩擦音となっているような例もあり、これも喉頭特徴がからんだ現象であるから併せて地理的・歴史的考察を行う。

平成 20 年度以降

平成 19 年度と同様に一方では休暇中に現地調査を行い、学期中はその整理・計測を行うとともに、諸文献に報告された現象を集成して言語地図の形にまとめる。その具体的な課題は平成 19 年度と同様であるが、研究の過程において新たな現象が見出された場合には、それも課題に加える。

上記の具体的な諸課題はそれぞれ関連した現象だが、個別に扱うことも可能であるから、3 年間を通して可能な限り上記諸課題をまんべんなく扱うことができることを期したい。

ちなみに付言しておく、この研究課題は私が個人で行うものであるが、アジアの広範な言語群にまたがる大きな課題であるので、それぞれの言語の専門家に教を請うことは必須である。その点につき、ここ数年来「中国語・東アジア諸語研究会」ないし「東ユーラシア言語研究会」の活動を展開してきており、日本の中堅・若手を中心とする東アジア・東南アジア諸言語の有力研究者が一同に会して研究する場を持っていて、経常的に諸言語の専門家に具体的問題について意見を求めることができるようになってきている。また、中国の南開大学のカム・タイ系諸語の専門家である曾曉渝教授とは数年前から毎年中国西南地域でタイ系言語・漢語の共同調査を行っており、韓国中国言語学会とは二年に一回に日韓中国語学国際会議を共催し、タイのチュラロンコン大学言語学科については現在私が半年の在外研究中であり、カンボジアの音声言語地図を作成企画中の Phillipi Jean-Michel 博士やモンゴル国立大学のモンゴル語史の専門家のジャンチュウ教授とも直接現地でコンタクトをとっており、こうした現地の専門家たちとも必要に応じて協力関係を持つことが可能になっている。

4. 研究成果

平成 19 年度

現地調査をアジア地域の各地で行い、諸言語の喉頭特徴を含む音声を観察・記述した。具体的には台湾の南島語の一つセディク語霧社方言・ヤミ語、ベトナム語北部・中部・南部の諸方言、ベトナム・インドネ

シアに分布するチャム語系の諸言語(チャム語・エデ語・アチェ語など)、ミャオ語などがある。特にベトナム語諸方言は声調に関して喉頭特徴をさまざまな形で併い、しかもその様相が特に中部・南部方言において標準語と異なっていて、意味深い。

また、明代・清代のタイ系言語などを記録した『華夷訳語』の諸本を台湾・中央研究院傅斯年図書館、北京の故宮図書館などで原本も含めて調査・記述した。またその研究を行い、論文をまとめて研究成果の一部を発表した。

一方、タイ語のラームカムヘン碑文に対して注解を行い、現代タイ語諸方言との対応関係について考察した。

朝鮮漢字音における有気音・無気音の対応の不規則性はこれまで不可解とされてきた難問の一つであるが、一解釈を書評にて提起した。

東アジア・東南アジア地域を対象とした広域言語地図の作成のために、2007年12月に全国の研究者とともに研究会を開催し、方言調査状況の把握やこれまで行われてきた言語地理学的研究の跡づけを行った。この結果を踏まえて次年度以降に具体的な項目をとりあげて言語地図の描図に着手したいと考えている。

平成20年度

2008年8月から9月にかけてシベリアのツングース系言語、中央アジア諸国のチュルク系諸言語および漢語ドンガン語、インドネシア・ベトナム等のオーストロネシア語(チャム語を含む)とベトナム語諸方言などの諸言語に対して喉頭特徴を含む音声学的側面についての現地調査を行った。2009年3月にも台湾とインドネシアの南島語およびベトナム語諸方言の音声記述を行った。また、小川尚義が20世紀初頭に集成した台湾南島語の基礎語彙資料に基づき、言語地図化を行った(2009年3月に台湾で行われた台湾言語地理学に関するワークショップで発表)。これは次年度の喉頭特徴に関する東アジア言語地図作成のための重要な布石となるもので、これにより言語地図化の技法を確立した。古文献の面では華夷訳語のタイ系言語に関する研究を進め、その成果の一部を2008年5月にタイのチュラロンコン大学で開催したシンポジウムで発表した。その際、チェンマイにおいて『八百館訳語』における語形が現代チェンマイ語でどのように発音されているかの調査も行った。ほか、古文献に関しては朝鮮語のハングルの起源に関するパスパ文字の影響関係について研究し、2008年11月に韓国で開催されたワークショップで発表した。また朝鮮漢字音に関する著作の書評を通して朝鮮漢字音における有気性の問題に

ついて仮説を提出した。唐代に本邦にもたらされた仏教音楽・声明に反映した中国語原音声調調値について2008年10月に二松学舎大学で行われたシンポジウムで発表した。

平成21年度

当初の計画では、イランやコーカサスに調査に赴く予定にしていたが、社会情勢が不安定である如くであったのでとりやめた。そして、2009年8月-9月にかけてベトナム語の追加調査を行い、更に中国・延吉に赴いて延辺朝鮮語の調査を行い、続いて中国内モンゴル自治区フホトにてモンゴル語の調査を行った。

2009年9月には韓国・全州で開催された第一回訳学書学会において明代中国語に関する研究発表を行い、韓国・牙山の鮮文大学校中韓翻訳文献研究所を訪れて朴在淵所長と朝鮮資料による中国語史研究について討議を重ね、同研究所所蔵文献の調査も行った。その後、中国・威海にて第三回中韓日中国語学国際シンポジウムでこの三国を始めとする東アジア諸言語交流に関する発表をした。2009年12月には韓国国語学会の大会に出席し、かつ韓国国会図書館にて『翻訳朴通事』の原本の調査をした。

このようなフィールド調査・文献調査に加えて、理論的考察も進め、2009年12月には国立国語研究所のプロジェクト集会で、中国語上海方言・チベット語ラサ方言・フランス語において音節が短くなることと音節声調が語声調に変化することなどの一連の音韻変化についての関連について発表した。

以上の研究によって、東アジアの広範な言語に基づいて喉頭が制御している音調・phonation type・長さなどの特徴の相互関係が実に多種多様であることが観察され、また文献によっても跡づけられた。

##### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9 件)

遠藤光暁, 崔世珍 『韻会玉篇』について, 訳学と訳学書, 査読無, 第1巻, 近刊, 頁数未定

遠藤光暁, “饅頭”一詞在漢韓日語中所指的事物及其演变過程, 韓漢語语言学探索, 査読無, 2010, 467-480

Mitsuaki Endo, Phonology of Thai in the Ayutthaya Period as reflected in The Sino-Siamese Vocabulary of the Bureau of Interpreter, Proceedings of the Chulalongkorn-Japan Linguistics Symposium, 査読無, 2009, 75-85

遠藤光暁, 20世紀初台湾原住民語言地図: “手”和“五”, 台湾的語言方言分布与族群遷

徙工作坊(97年度花蓮場)會議論文集, 查読無, 2009, 87-99

遠藤光暁, 声明と漢語声調史研究, 2008年国際シンポジウム仏教音楽に聴く漢字音 梵唄に古韻を探る, 查読無, 2009, 74-75

遠藤光暁, 書評・紹介 伊藤智ゆき(著)『朝鮮漢字音研究』, 言語研究, 查読有, 133, 2008, 163-170

遠藤光暁, 對於照那思図《訓民正音基字与八思巴字的關係》的討論, 訓民正音と八思巴文字国際学術Workshop 論文集 查読無, 2008, 45-63

遠藤光暁, 華夷訳語研究の諸課題, 語学教育フォーラム(大東文化大学), 查読無, 13, 2007, 1-6

遠藤光暁, 『暹羅館訳語』乙種本の声調, 語学教育フォーラム(大東文化大学), 查読無, 13, 2007, 31-36

[学会発表](計 6 件)

遠藤光暁, 崔世珍『韻会玉篇』について, 訳学書学会第一回学術大会, 2009年9月12日, 韓国・全州・又石大学校

遠藤光暁, “饅頭”一詞在漢韓日語中所指的事物及其演变過程, 第三回中韓日中国語学国際学術研討会, 2009年9月19日, 中国・威海、山東大学威海分校国際教育学院

遠藤光暁, 上海語・チベット語ラサ方言・フランス語の音節長の短縮に伴う諸音韻変化 円唇前舌母音・鼻母音・語声調など, 国立国語研究所日本語レキシコンの音韻特性プロジェクト, 2009年12月6日, 国立国語研究所

遠藤光暁, 声明と漢語声調史研究, 2008年国際シンポジウム仏教音楽に聴く漢字音 梵唄に古韻を探る 2008年10月19日, 二松学舎大学

遠藤光暁, 對於照那思図《訓民正音基字与八思巴字的關係》的討論, 訓民正音と八思巴文字国際学術Workshop, 2008年11月18日, 韓国学中央研究院

遠藤光暁, 20世紀初台湾原住民語言地図: “手”和“五”, 台湾的語言方言分布与族群遷徙工作坊(97年度花蓮場), 2009年3月23日, 台湾花蓮市東華大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

遠藤 光暁 (ENDO MITSUAKI)  
青山学院大学・経済学部・教授  
研究者番号: 30176804

(2) 研究分担者 なし